



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移動が再編する地域社会 : ニセコエリアにおける社会的包摂・排除、制度・政策、地域アイデンティティ
Author(s)	新海, 茜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第17014号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100067
Type	doctoral thesis
File Information	SHINKAI_Akane_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名： 新海 茜

学位論文題名

移動が再編する地域社会

ーニセコエリアにおける社会的包摂・排除、制度・政策、地域アイデンティティー

日本有数のスキーリゾートとして知られるニセコエリアは、明治時代の開拓期にはじまり、ライフスタイル移住者やオーストラリア人スキーヤーなど、歴史的に多様な人びとを受け入れながら地域として発展してきた。移動が折り重なる歴史的過程の中で、地域は単なるスキーリゾートとしてのイメージから〈外国〉としてのイメージをも帯びるようになり、その地域アイデンティティは多重化を遂げてきた。移動の背景には、バブル経済期のリゾート法をはじめとする国・地方レベルの諸政策が存在し、それらが移動を制度的に規律してきた。その一方で、冬季に急増する英語圏からの外国人の移動を〈英語留学〉を掲げる地域政策へと組み込む動きに見られるように、移動そのものが政策形成を方向づける側面も存在した。

モビリティ論を体系化したジョン・アーリ（2007=2015）は、移動がもたらす高度な流動性こそが近代社会の大きな特徴のひとつであり、移動が新たな社会階層を形成することを指摘した。アーリは移動の背景にある「システム」性に着目し、移動は各種制度・政策や技術インフラといった社会システムによって規律されると同時に、制度そのものを再編する動的なプロセスと捉えた。そして、記号的イメージを帯びる人やモノの移動によって「場所」が消費・生産される過程で、「場所」の解釈も変容していくと論じた。もっとも、アーリのモビリティ論は主として国民国家を前提とした抽象的水準にとどまっており、具体的地域において移動がいかに制度化され、またいかなる齟齬や矛盾を生み出すのかについては十分に検討されていない。本論文は、この理論的課題を出発点としながら、ニセコエリアという具体的地域を分析対象とすることで、移動を単なる中立的な流動現象としてではなく、権力的な再編プロセスとして捉え、その過程で生じる構造的課題を、社会的包摂・排除、権力的非対称性、地域アイデンティティの観点から実証的に明らかにすることを目的とした。これにより、アーリのモビリティ論をローカル・ガバナンスの視座へと拡張することを試みた。

以上を明らかにするために、本論文は以下の構成で展開する。第1章および第2章では、各種歴史書や論文、行政文書を中心とした文書分析により、ニセコエリアにおける移動の歴史と、それを構造化してきた制度・政策の展開を整理し、同地域が国際スキーリゾートとして発展する中で形成された地域イメージおよび地域アイデンティティを明らかにした。これにより、ニセコエリアが歴史的に〈移動の結節点〉として発展してきたことを実証した。

第3章では、アンケート調査、インタビュー調査、参与観察など、量的・質的手法を組み合わせた混合研究法により、住民構造と言語の二領域において移動が社会構造に与えた影響を分析し、社会的包摂・排除および権力的非対称性の観点からその実態を明らかにした。その結果、移動がもたらす社会再編は中立的過程ではなく、非対称性を帯びた権力的再編プロセスであることを示した。

第4章では、行政文書や条例の分析に加え、行政関係者へのインタビューおよび参与観察を通じて、ニセコエリアにおける移動を規律する制度・政策の趣旨および背景を体系的に明らかにし

た。

第5章では、これらの政策が実際の移動の実態とどの程度整合しているのかを検証し、国と地方の政策構造を踏まえつつ、制度と実態の齟齬を分析することで、移動関連政策の部分的な失敗とその構造的要因を明らかにした。

以上の分析を踏まえ、本論文は以下の結論に到達した。第一に、ニセコエリアにおけるスキーリゾート開発は、地域内外との関係では人や資本の流入を促進する一方で、地域内部では住民とスキー文化との心理的・社会的距離の拡大をもたらしてきた。このことは、移動が関係性に応じて異なる効果を生む〈移動の多重性〉を示すものである。

第二に、地域アイデンティティを規律する〈国際〉というイメージの背後には、英語に対する優位性を支持する「反転したオリエンタリズム」(遠藤, 2018) と呼ぶべき非対称的なまなざしが存在することを明らかにした。さらに、英語は多国籍環境におけるリング・フランカとして社会的包摂に寄与する一方で、地域への言語的同化を志向する主体に対しては排除的にも機能するという、相反する二重の性格を有していることが示された。このことは、言語が有する社会的役割および権力性の複雑性を明らかにするものである。

第三に、地方行政における移動の制度化には部分的な限界が存在することを実証した。その背景には、移動を規律する制度・政策が国と地方の二重構造となっていること、また単一自治体による包括的対応の困難性があることが明らかとなった。これらの点からも、移動が複数の政策領域にまたがる〈移動の多重性〉が示唆される。

本論文は探索的研究の性格を有しており、各論点については今後さらなる実証研究の深化が求められる。しかしながら、移動がもたらす地域社会の再編をローカル・ガバナンスの視座から捉え直し、移動が政策へと組み込まれる過程で生じる構造的課題を明らかにした点において、本研究は流動化する社会における地域統治のあり方に対して重要な示唆を提供するものである。